

[潤生園ニュースレター]

vol.10

2025

うるる



「笑顔」が動きだす場所

特集

潤生園が創設期から志してきた「自立支援」その現在の営み取材しました。

対談

「アーツ×ダイアログ」対話型鑑賞(後編)

三ツ木紀英 (ARDA 代表理事・アートエデュケーター) × 時田佳代子 (潤生園理事長)

はじめに

「『生命の尊厳を守る』という理念を掲げ、利用者主体の介護を目指して開設した潤生園は、日課や食事献立といった生活の基本を施設側が一方的に決めるのではなく、利用者一人ひとりのニーズを聴き取り、できないことは援助し、できることを増やしながら、なるべく自立していただくことを基本にしました」

（『生老病死と介護を語る』「全てが高齢者個々のQOLを高める実践」より）

社会にまだ在宅サービスが整っていなかった創設期（昭和52年）から「地域で暮らし続けること」を基本にして歩んできた潤生園。デイサービスの今、そしてこれからの「やすらぎの家」の営みから展望します。

うるる編集部

作品作りが暮らしを彩る

住宅地の民家を改築した「潤生園やすらぎの家」は現在、小田原・南足柄エリアに8ヶ所ある。施設というよりは、馴染みの友人の家のような佇まいだ。玄関から声をかけると、「潤生園やすらぎの家栢山」の施設長・上西寿幸さんが満面の笑顔で迎えてくれた。背後に葛飾北斎『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』の巨大な折り紙アート作品が見える。すごい大きさだ。ふと見回すと壁中に大小の作品が飾られている。「驚きましたか。ご利用者のみなさんで作られたんですよ」。介護雑誌の作品コンテストに出品してみたらなんと一位に入賞。近隣の小学校に飾られていた時期もある。「作るだけじゃなくて見て褒めてもらえると、やりがいも違いますよね」。表彰状が飾られた通路の奥の居間からは、朗らかな話し声がもれてくる。

「生活リハビリ」を ケアの中核に据えた支援

たとえ認知症であっても、住み慣れた自宅で暮らし続けるための居場所「やすらぎの家」が誕生したのは2002年。上西さんは入社直後からその立ち上げに関わっている。「当時はお世話型の介護が主流の時代です。職員が先回りして手伝い、危険な要素は取り除く、できるかどうかにかかわらず」やってあげちゃう介護を、最初の頃は我々もやっていました」。

「笑顔」が動きだす場所

潤生園と人 上西寿幸さん（介護支援専門員、介護福祉士）

それから23年、家事をしながら体を動かしていた
だく「生活リハビリ」をケアの中核に据えた現在の支
援のあり方は、お世話型の介護と真逆といつていい。

まず、ご利用者が自分でできることには手を出さ
ない。例えば送迎時の施錠開錠など、どんなに小さ
なことも、職員がやってしまったほうが早いこと
でも、できることはやっていただく。できないこと
はどうやったらできるのかを考える。そして「選択し
ていただく」こと。日中の過ごし方も、選ぶ主体は常
にご利用者。この構えを職員全員で徹底し大切に守っ
ている。「たとえレクリエーションであっても、経験



ための雑巾販売が始まったのだ。目標金額は10万円。
さすがに難しいのでは、という心配をよそに、潤生
園の他拠点からも、地域のお店からも協力が集まり、
満額以上の寄付を達成した。「役に立たない、という
言葉とは180度の転換ですね」。



や自信がないことを押し付けられるのは不安ですよ
ね。やったことがある、得意だなと思える『昔取った
杵柄』であれば、笑顔や自信を取り戻していただけ
るのでは、と」。

居間では次の折り紙作品『風神雷神』の制作が始
まっている。半分に折るだけの方、さらに細かい折
りを担当する方で流れ作業になっている。創作意欲
がご自宅までつながり、折り紙を持って帰る方や、
作品にびつたりの包装紙を見つけて持ってくる方も
いらっしやるそうだ。

「誰かの助けになる」こと

居間の隅には、くるっと巻かれてラッピングされ
た雑巾がたくさん積まれている。「この仕事を始めて
からずっと、『私たちはもう役に立たない』っていう
ご利用者の言葉を耳にしてきました。そんなことは
ない、とお返事しながら、言葉で返すだけじゃ足り



職員いらすのデイサービス、 という夢

台所ではお昼の支度が始まっていた。今日の献立
は天ぷら。食材を切るのも揚げるのもご利用者が自
主的に担当している。「家事をずっと担って
きたみなさんですから料理は得意技。娘や孫
世代の私たちは教わる一方ですよ」。筍や山
菜が届いても、あつという間に煮てくれて頼
もしい、と、手元を見守っていた職員が笑う。
みんなで作って、美味しいねとしやべりなが
ら食卓を囲むと、食欲が戻ってくる一人暮ら
しの方も多いそうだ。

「自立支援というケアのかたちに転換してい
きたい事業所が見学に来ることもあります。
慣れたケア環境の変革に勇気が出ない、とい
う方々も、ご利用者の様子をみると意識が変
わる。みなさんこれだけの力を秘めているの
に、こちらがそれを見い出せてないだけなん
だな、と」。上西さんは続ける。「できること
が見つかったら、次はどうお声をかけたらや
る気になっていただけるのかも課題です。こ
この職員たちはみんな頼み上手ですよ」。

近年の介護現場では、国から提示された指
標に照らす「科学的介護」が重要視されてい
る。提供するケアが科学的に根拠があるかと



ないなって思っただんです」。そこで上西さんは考えた。
ご利用者が得意なことで誰かの助けになる取り組み
はないだろうか、と。思いついたことの一つが雑巾
縫いだ。ご利用者の有志が縫った雑巾を、近隣の小
学校に届けている。「手伝ってくれる祖父母がいない
僕らのような共働き世帯は雑巾のプレゼントは本当
に助かる。小学校にも喜んでいただけて、繋がり
ができたんです」。お礼の手紙が届き、授業での訪問や
放課後に遊びに来る子どもたちとのうれしい交流も
生まれた。

活動には続きがある。2024年能登半島地震の
被害をニュースで知ったご利用者から「私たちにでき
ることはないか」という声が上がリ、すぐさま募金の

うかという評価だ。「やすらぎの家栢山」では、「ご利用
者のADL※1（人が日常生活を送るために行う基本的な動作）
が悪化せず保たれている」という数値結果が出た。ケ
アの方向性に自信を持つていい、ということだ。

でも満足はしていない。上西さんが描く地域密着型
サービス「やすらぎの家」の役割はもっと広々としてい
る。「将来は職員いらすのデイサービスができたらいい
なと。施設の中にとどまらず地域でお互いに助け合
う、たとえばデイサービスの中で赤ちゃんのお世話を
する、そういった『富山型デイサービス※2』みたいな
こと、実現できそうじゃないですか」。

高齢者も、子どもも、障害がある方も、一緒に地域
の中で安心して、笑って生活していくようなのが理想
と話す上西さん。その笑顔は、「科学的にも優れたケア」
の支え手として、優しい未来を作りだす力そのものだ。



上西寿幸（じょうにし としゆき）

介護支援専門員、介護福祉士

2002年から潤生園勤務。2008年に
最年少でやすらぎの家男性管理者に
なった。現在やすらぎの家栢山・富水
2拠点の管理者と兼任で、「潤生園や
すらぎの家」（全8ヶ所）統括課長。

※1——ADL：Activities of Daily Living（日常生活活動）
※2——富山型デイサービス：高齢者・障害者・児童という福祉施設の
縦割りを排し、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが一緒に住み慣れ
た地域でケアを受けることができるサービス。富山県では県の総合計
画で、富山型デイサービスの推進を重要施策と位置づけている。

梅澤 順子

潤生園やすらぎの家栢山
勤続年数: 12年
好きなこと: 旅行

山岸 潤子

潤生園やすらぎの家和田河原
勤続年数: 1年
好きなこと: 喋ること、旅行

鈴木弘恵

潤生園やすらぎの家南鴨宮
勤続年数: 14年5ヶ月
好きなこと: 日常で些細な発見をすること、「ぶー（愛犬）」との時間

八尋摩耶

潤生園やすらぎの家足柄
勤続年数: 3ヶ月
好きなこと: 休日に愛犬と遊ぶこと

“ご自宅での自分らしい暮らし”を続けていただくために

「やすらぎの家」スタッフの方々に
日誌を書いていただきました！

2025年5月1日 - 5月30日



5月5日【月】

朝いちばんでお迎えに行くと、布団の中から「今日は休みます」とＴ様。やむを得ず、後でもう一度、お迎えに上がることにする。「また来ますね」と立ち去る私の背中の中からは「もう来なくていいよ」とＴ様の声…。再び訪問すると、やはり布団を被っていらつしやるので、粘り強くお誘いを続ける。話をしていくうちに気分が上がり、行く気持ちになってくださったので、身支度をして、ついに「やすらぎの家」へレッツゴー。

しばらくするとお仲間と楽しげにお喋りをするＴ様。「こんな楽しいところ、私は一度も休んだことがない、休むわけがないよ」。その言葉に思わず私も笑顔になりながら、朝の光景が頭に浮かぶ。【鈴木】

5月7日【水】

「やすらぎの家」の庭で、花に水やりをしていたＫ様が「かわいい白い花が咲いているよ」とキラキラした目を向けている。その先にはＫ様と植えた白い紫蘭の花が咲いていた。2年ほど前、Ｋ様をお迎えに行ったとき、Ｋ様のお宅の近所に「ご自由にお持ちください」と書かれたバケツに株分けされて入っていた紫蘭だ。Ｋ様と「どれにしようかな」と話しながら2株いただき、一緒に庭に植えた。このときのことをＫ様は忘れていたが、2年前より数を増した可愛らしい花たちは、今年もみんなの目を



たちは、今年もみんなの目を

5月21日【水】

何ヶ月も地道に制作した刺繍の作品を、Ｕ様が額に入れて持ってきてお披露目してくださいました。本当に素晴らしいので、みんなで感心する。

この拠点が「自立支援プロジェクト」を立ち上げて生活リハビリに力を入れ始めた3年前頃から、Ｕ様はご自宅でも花壇を作ったり、仕事へ行く娘様のお弁当作りを手伝われたり、最近では食事をふるまうこともあるそうだ。その他にも手芸、旅行、推し活などなど、次から次へとチャレンジして立ち止まることがない。年齢に関係なく、新しいことに挑戦できる人に私もなりたい。

【鈴木】

5月22日【木】

「やすらぎの家」への通所が始まったF様。来られた当初は「デイサービスはつまらなくて嫌。私にはもってできることがあると思うの」と話されていたが、最近では「私に任せてー」「私、タオル畳みのプロなのよ」という言葉が聞かれるように。とても嬉しかったのが、「娘にも、私が食器をぜんぶ洗っているんだよ、タオルも畳んでいるんだよって話しているのよ」と、満面の笑顔でお話をされていたこと。生活リハビリの中で体を使うことはもちろん大切だけど、日々の生活の中で使命がある、役割がある、誰かの助けになる、ということが人を元気にし、イキイキさせるのだ、と気づかせていただく。【八尋】

楽しませてくれている。【鈴木】

5月8日【木】

今日の制作活動の時間は、ご利用者様それぞれに好きなことをして過ごしていただいた。小学校に寄付する雑巾を縫う方、コンクールに出品する折紙パーツを折る方、募金を募る販売商品の編み物をする方…どなたも制作に熱中し、あつという間にお帰りの時間となる。何人かのご利用者様は、縫いかけの雑巾用タオルや折り紙をボランティアバックに入れ、「次回までに仕上げてくるね」と持ち帰ってくださった。自主的に目的をもち、計画を立てて行動してくださるご利用者様の姿をうれしくお見送りする。【梅澤】

5月12日【月】

H様、笑顔で来所。ご自宅が近いこともあり、デイサービスの時間になるとご自分のペースで歩いて来られる。昔からの知り合いの顔を見ると、安心したようにその方の隣の席へ座られ、とても楽しそうにされている。ほかの方々は会話をすることがあまりない。お帰りになった後で、このままでもいいのか、もっといろんな方と交流していただく方法がないかと職員同士で話し合う。【山岸】

5月14日【水】

H様、いつもと変わらず笑顔で来所。いつものご自分の席へ座われ、隣の席の方

5月23日【金】



今日は白玉作りのレクリエーション。白玉粉を混ぜたり、こねたり、丸めたり、お鍋で白玉を茹でていただくところまでお願いをした。

白玉を丸めているとき、S様が「どうやって丸くしたらいいのかわからない。恥ずかしくて、誰にも聞けないわ」と涙を流されながらスタッフにお話する姿が見られた。すると、そのお話を聞いていたE様が「わたしも作り方、忘れちゃったのよ」と仰る。それを聞いていたQ様が笑顔で「わたしが教えて差し上げます」と声をかけてくださった。そこから作業は賑やかに進み、形も大きさもさまざまな白玉が完成。召し上がりながら「わたし、人見知りだけど、仲間とみんなで白玉作りができてうれしかった」と言ってくくださったS様。

ご利用者様の「みんなは一人のために、一人はみんなのために」の精神に、職員のほうが支えられている。【八尋】

5月27日【火】

H様、来所。「ここに来るのが楽しみなの」。そう朝から話され、荷物を置かれると、他のご利用者の方々がいるテーブルに行かれ、ご自分から積極的に話かけられ笑顔でお話する姿が見られた。

もともと地域の活動に参加され、お話をすることが好きだったとのこと。H様はこのところご自宅での畑仕事なども再開し、

と会話がはずんでいた。今日はたくさんの方々とコミュニケーションを取っていただいてみよう、と、ゲームの時間を利用して席の移動をお誘いした。すると、「いいわよ」と楽しそうにレクリエーションに参加された。ほつと安心。一步、前進。【山岸】

5月19日【月】

日々のお食事やおやつはご利用者様と職員がお買い物に行く。今日は認知症のあるO様と、まずはお味噌汁に入れる具材を買いに「やすらぎの家」近くの野菜販売所へ。到着すると笑顔で「絹さやなら栄養もあっていいんじゃないかしら」とはつきり話してお決めになられた。その後、おやつを買いに。「今日はBさんが好きなおやつにしよう。Bさん、このお煎餅、好きなよね」と微笑まれ、レジに並んでご自身でお会計をされた。帰り道、「今日は一緒にお買い物に行けて、嬉しかったよ。家でもたまには食事をつくってみようかしら」という言葉を思いがけず聞かせていただく。



お買い物に出かけるという体験が、ごはん作りの記憶を刺激して、食事のメニューを考えた、外出先でお仲間の好きな食べ物を思い出す、ということにつながる。暮らしに根づいた行為の豊かさを学んだ一日だった。【八尋】

5月29日【木】

話があるの、と3名のご利用者様がスタッフに言ってこられた。「これからは私たちの顔を隠さず、Facebookに写真を投稿してください。最初は恥ずかしくて嫌だったけど、私たちがやっていることはとても素敵なことだもの」。いつも楽しそうに過ごされている3名のご利用者様は自信に満ちあふれた表情をされていた。

【梅澤】

※幾つかの「やすらぎの家」では、ご利用者様のご家族や地域の方々に向けて定期的にFacebookで発信する試みを行っている。

5月30日【金】

昼食中のご利用者様の話題は来週の昼食のメニュー。「たまには麺類が食べたいね」「そろそろ冷やし中華もいいね」「ラーメン餃子もいいね」。食べ物の話はいつだって大盛り上がり。昼食メニュー会議の結果、晴れたら「冷やし中華」で曇りや雨だったら「ラーメン餃子」に決定。季節に合った美味しい昼食を、テキパキと作ってくださるご利用者のみなさま。その元気さと腕前に感謝、感謝。さあ、来週のお天気はどうなるでしょう。【梅澤】



三ツ木紀英 × 時田佳代子

ARDA代表理事
アートエデュケーター

潤生園理事長

アーツ



ダイアローグ

対話型鑑賞【後編】

「この絵の中で何が起きていますか？」

「どこからそう思いますか？」

「ほかに発見はありますか？」

という三つの問いを使って

グループで作品を鑑賞する対話型鑑賞。

NPO 芸術資源開発機構 (ARDA) の三ツ木紀英さんと、
高齢者のケアとアートの関わりについて考えます。

お互いの声を聞き合う場

時田 三ツ木さんが代表を務められている ARDA は、芸術という資源を開発し、その新しい可能性を社会に活かすことを目的とされている NPO です。どのような経緯で取り組みを始めたのですか？

三ツ木 高齢者に関わる事業は創設当初からの取り組みです。2000 年頃、介護保険法が施行されて、地域に高齢者施設がたくさんできたのですが、視察した施設では高齢者が生き生きしていないように見えました。施設に入った途端、それまでの生活から切り離されて画一的なアクティビティになり、自分が好きだったものが持ち込めない。そんな環境を変えたいと創設者が「アートデリバリー」という事業を始めたんです。高齢者施設にアーティストが行って絵を描いたり、ダ



ンサーと体操をしたり、歌をつくったり、演奏したり。私たちが実施するワークショップは、高齢者の方だけでなく、介護士の方も一緒に体験していただくのですが、例えば高齢者の方が選ぶ絵の具の色一つにも、その人の思い出や大事にしていることが紐づいていることに介護士さんが気づかれるんです。すると「介護している相手」という存在から、個人の姿への発見が生まれて、自然と介護のあり方も変わってくるんですね。

時田 そのようなワークショップを下地にして「対話型鑑賞」に転換していったのですね※1。

三ツ木 転換の大きな契機になったのは、2011 年の東日本大震災でした。震災後、私たちが東北にすぐに行って、仮設住宅、幼稚園、保育園などでワークショップを展開したのですが、あれだけの大きな災害の前で、アーティストが行って開催するかたちのワークショップでは限界があると感じました。自分たちの限界にうちのめされる一方、東北の方々のお互いを思いやる気持ち、お互いにケアをしながらつながり合う豊かさは素晴らしいものがありました。東京からなにかを持ち込むのではなく、人と人が関

わり合う豊かな場から立ち上がってくる土壌をつくりたいと思いました。そのときに VTS (ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー…アートを通じて鑑賞者の「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」を育成する教育カリキュラム。同対談前編参照) が役立つのではないかと考えたんです。震災のような災害や原発事故のような人災があったときに意見が違う隣人を尊重し合いながら新たな社会をつくるためには、お互いの声を聞き合う場を日常的にも用意しておくことが必要なのではないかと思い、アートを通じて意見の異なる他者が向き合う対話型鑑賞を始めました。

時田 対話型鑑賞を高齢者施設で行う場合、美術館のような見る環境が整っていませんね。実際はどのように進めているのですか。

三ツ木 美術館のように原画は見られないので、施設に複製画を持ち込んで行うことが多いです。私たちが関与したグループホームでの事例では、最初からみんなで一枚の絵を見るのではなく、はがきサイズのカードを使って自分の好みを伝え合ったり、ゲーム形式で複製画を見ながらお話しする、というようなところ

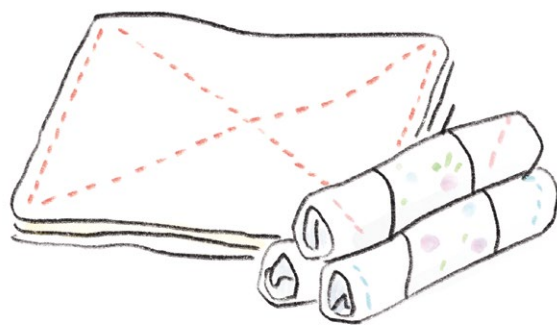


から始めました。ご利用者一人にボランティア一人くらい感じ、一人ひとり視線を合わせて丁寧にコミュニケーションしながら心理的に安全な場をつくると、数ヶ月後にはグループで一枚の絵を見て、互いの話を聞き合う対話型鑑賞のかたちを取ることができるようになりました。一年間続けると、普段あまりお話ししない人同士が話すようになったり、いつも同じ席に座っている人が、違う席に座るようになったり、と行動にも変化がありました。美術館にお出かけするイベントも実現しました。

アートとフレイルの予防

時田 高齢の方にとっても、「文化に参加する」ことの誇らしさや、絵の世界に飛び込んでいく喜びは深いのではないか





編集後記

紙テープできれいにラッピングされて出番を待つ、「やすらぎの家栢山」のご利用者さんが縫ったたくさんの雑巾。「だれかのためにできることを」という気持ちは、自分の生きる力も支えてくれるということを教えていただいた取材でした。

潤生園ニュースレター「うるる」vol.10

発行日 令和7年7月
デザイン TAICHI ABE DESIGN INC.
撮影 橋本貴雄(P2～5) 牛山恵子(P8～10)
イラスト 落合恵
編集・執筆 牛山恵子(合同会社スタジオバンダ)
大谷薫子
発行者 社会福祉法人 小田原福祉会
うるる編集部
神奈川県小田原市穴部377
<https://junseien.jp>